

「淡路島・南海島サッカー交流5周年記念」事業

異文化に暮らす人々との相互理解を深めるため サッカーを通じてコミュニケーションの大切さを学ぶ

島同士の交流の提案を受けて始まった淡路島と韓国・南海島の子どものサッカー交流試合。スポーツを通じて異なる言語や習慣を持つ“隣人”を理解する機会を持つことは、グローバルな視野を身につけるための第一歩となる。5周年となった2013年度は、これまでにない規模の交流事業となった。

両島で盛んなサッカーの試合を通じて 淡路島の子どもたちに国際交流を体験させる

未来を創造するのは子どもたちである。その子どもたちを育むのは経験である。今、盛んに国際交流の重要性が言われているが、子どものうちにそれを経験しておけば、大人になってそうした局面に立ち会ったときに、気後れや不安を覚えることが少なくなるに違いない。2009年度から続けられている淡路島と韓国・南海島の子どものサッカー交流は、その意味でも有意義な国際交流の実例と言えるだろう。

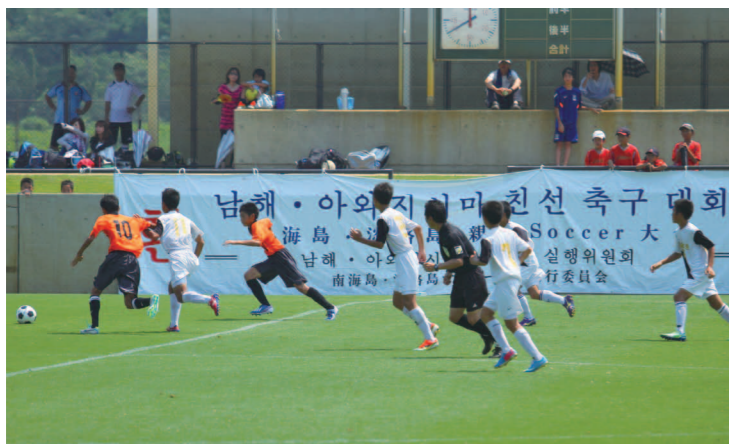
「2008年10月に慶尚南道南海郡に属する南海島から、淡路島と島同士で交流したいという話が持ちかけられました。翌年3月には南海郡の幹部や議会関係者が淡路島を訪れ、その後、淡路島3市(淡路市・洲本市・南あわじ市)の職員も南海郡を訪問しました。両者で検討や協議を重ねた結果、交流の先駆けとして、淡路島のサッカーク

ラブや中学校のサッカー部に所属する14歳以下の子どもたちの選抜チームと、南海島の海城中学校のサッカーチームが交流試合を行うことになりました」

淡路島・南海島サッカー交流実行委員会を担う淡路広域行政事務組合の山本真民さんは、サッカー交流事業の経緯について、そう語る。交流事業は、初年度に南海島から20名を受け入れたのを皮切りに、翌年度には27名を南海島に派遣、以降、受け入れと派遣を交互に繰り返している。

この事業の目的は、サッカーの試合をすることではなく、それを通じて、淡路島の子どもたちに国際交流を体験させることである。そのため、毎年、派遣や受け入れに先立ち、参加する子どもたちを対象に韓国語や韓国文化の学習会を実施している。その講師を務める淡路広域行政事務組合の平真由己さんは、以下のように話す。

「2013年度は、1回2時間の学習会を計7回実施しました。韓国語で簡単な挨拶と自己紹介ができること、自分の名前を韓国語で書けることが中心ですが、そのほかに韓国の文化や習慣などについてレクチャーします。これは参加のための必須条件ですが、子どもたちは楽しんで参加しています。また、交流後には毎回、アンケートや感想文の提出も求めます」



淡路島内のアスパ五色で少年たちによる熱戦が展開された



3泊4日の合同合宿で親交を深めた両島の少年たち



5周年ということでグルメ、観光案内、ショッピングなどのブースも開設され、イベント色の強い交流事業となった



元日本代表 永島昭浩さんによるサッカースクール

淡路島の住民に交流事業の認知度を高めた イベント盛りだくさんの5周年記念大会

2013年度の交流事業は、交流5周年という節目の年にあたってのこともあり、これまでにない規模となった。まず、サッカーの交流試合は、淡路島選抜2、島内クラブ1、兵庫県内クラブ1、南海島1チームという5チームによるリーグ戦で行われた。さらに、サッカー元日本代表の永島昭浩さんを講師とするサッカースクール、キッズサッカー教室、発達支援フットサル大会、日韓剣道交流大会を行ったほか、淡路島と南海島の魅力を伝えるためのB級グルメマーケット、特産品やグッズの販売、地域PRブースなども設けられた。

「5周年ということで、今回はイベント色の強い交流事業となりました。8月10日～11日という真夏の実施でしたので、当初、どれだけの数のお客様に来ていただけるのか不安でしたが、猛暑にもかかわらず、約2000人が来ていただきました。これまでは親を含め、サッカー関係者がほとんどでしたが、今回の催しで、島内の一般の方々も交流事業に対する認知度が高まったと思います」と、前出の山本さん。

平さんからは、「前年度は子どもたちだけの日韓グループを編成し、韓国の麗水世界博覧会を見学しました。今

助成団体:淡路島・南海島サッカー交流実行委員会
http://www1.sumoto.gr.jp/kouiki/index.html

担当者より

これまでにない大きな規模のイベントを開催。
淡路島・南海島サッカー交流実行委員会
淡路広域行政事務組合
山本真民さん(右)
平真由己さん(左)

助成のおかげで、ポスター制作などのPR活動を充実させることができ、一般の島民のみならずにも交流事業の一端を知っていただく機会となったうえ、島の活性化にもつながりました。資金的な課題などありますが、今後も、この交流事業を継続するとともに、さらに広がりのあるものにしていきたいと考えております。

回は3泊4日の合同合宿を行い、子どもたちが協力してカレー作りを行うなど、サッカーにとどまらず、交流が深まってきています」と、交流事業の深化を伝えるコメントがあった。

今回、参加した子どもたちから寄せられた感想文には、「韓国のサッカーや日本とは違う文化に触れることができ、いい勉強になった」、「韓国の子どもたちから、国を愛していること、誇りに思っていることが伝わってきた」、「一緒にカレーを作るだけでも、文化の違いや英語力の高さに驚かされた」、「言葉や習慣などが違っても、気持ちがあれば分かり合える」といった内容が多く見られた。子どもたちは身をもって交流と相互理解の大切さを学んだわけだが、このサッカー交流事業に参加した子どもたちが、将来的に日韓の懸け橋となるような存在に成長していくことを期待したい。



記念イベントの一環として行われた日韓剣道交流大会